

# A quarter of mammals face extinction

## 哺乳類の4分の1が絶滅の危機にある

Nature Vol.455(717)/9 October 2008

Natasha Gilbert

哺乳類に関する初めての包括的調査によると、世界の哺乳類種の4分の1が絶滅の危機に瀕しているという。哺乳類の全種のうち半数で個体数が減少しつつあり、なかには激減したものもある。例えば、タスマニアデビル (*Sarcophilus harrisii*) の数はこの10年で60%も減ってしまった。

この調査では、188種が、極めて深刻な事態を示すカテゴリーである「絶滅危惧IA類 (critically endangered)」に分類された。その1つであるイベリアオオヤマネコ (*Lynx pardinus*) は、野生の成獣個体数が84～143頭だと推定されている。一部の種では正確なデータが得られなかったが、研究者らは、絶滅の危機にある哺乳類種の割合は21～36%だと見積もっている。

この哺乳類調査 (J. Schipper *et al.* *Science* doi:10.1126/science.1165115; 2008) は、国際自然保護連合 (IUCN) による、絶滅危惧種につ

いての世界規模の再調査の一環である。IUCNは、絶滅の恐れのある生物種のレッドリスト ([www.iucnredlist.org](http://www.iucnredlist.org)) を毎年作成し、世界の生物の種としての「健全度」を包括的に評価・判定している。これらのデータは、各国政府や野生生物保全機関が保全管理戦略や資金配分を決める際に利用される。

ワシントンDCに本部を置くIUCN哺乳類評価プログラムのJan Schipperが率いた調査によると、個体数の変動傾向がわかっている哺乳類種の52%では個体数がしだいに減っており、保全策が施されないかぎり減少の一途をたどることになるという。哺乳類が現在直面している最大級の脅威は森林伐採や生息地減少、そして狩猟である。また、アフリカ南部では最も劇的な個体数減少が起こっており、そこでは霊長類のおよそ79%が絶滅の脅威にさらされていることが、今回調査から明らかになっている。

環境汚染などの新しい脅威が現れてき

ているため哺乳類の数は今後も減り続けるだろうと、Schipperはいう。「今回の調査結果は、世界全体の哺乳類の暗澹たる未来図を描き出すものだ。予想以上に多くの種で個体数が減少しつつあり、脅威も増している」と彼はいう。

この調査では、全部で5487種の哺乳類を対象としており、その中には、以前はレッドリスト用に評価がなされていたなかった海生哺乳類が含まれている。前

### 消え行く生き物たち

2008年のレッドリストには総数にして4万4838種の生物が記載され、2007年の4万1415種からかなり増えた。これらのうち絶滅の恐れがあるのは、2007年に1万6306種だったのに比べて2008年には1万6928種となっている。国際自然保護連合の最も慎重な評価に基づく、絶滅の恐れがあるか、もしくはすでに絶滅したと考えられる動物の割合は以下の通りである。

鳥類の12%、哺乳類の21%、両生類の30%、爬虫類の5%、魚類の4%

ISTOCKPHOTO



タスマニアデビル (*Sarcophilus harrisii*)



イベリアオオヤマネコ (*Lynx pardinus*)

NEWSCOM



ISTOCKPHOTO

回の世界規模の哺乳類評価は1996年に実施されたが、その情報の多くは古く時代遅れのもので、しかも、すでに認知されている約700種が含まれていなかったため、時系列での有意の比較は不可能だった。「今回の最新の調査結果が、保全状態の基準となるのです。次のステップは個体数推移の傾向を観察することです」とSchipperはいう。

研究者らが集めた詳細情報には、分布や生息環境、個体数の推移傾向、脅威となる事象などが含まれており、これらはすべて公開される予定である。「以前は

レッドリストがどのようにして作成されたのかをめぐって疑問が出されていた。しかし今は、データにアクセスして見ることができ、生息状況に関する判定がなぜそうだったかを知ることができます。現在は透明性がより高くなっているのです」とSchipperは話す。

今年のレッドリストでは、記載される動物の範囲も広がり（コラム「消え行く生き物たち」を参照）、多数の無脊椎動物が初めて加わった。これまでは情報がなかったため、レッドリストに載っていたのは、知名度の高い鳥類種や哺乳類種に限られて

いた。これらは世界の生物多様性のわずか2～3%を占めるにすぎないのである。

「ようやく我々は、非常に限られた生物種群から得られたデータに頼っていた『生物保全の暗黒時代』を脱しようとしているのです」と、ロンドン動物学協会で保全プログラムの主任を務めているJonathan Baillieはいう。「我々は、監視範囲をさらに広げて、もっと広範な生物分類群まで含め、おおいに客観的に、なおかつ代表者としての姿勢で、政策担当者に情報提供や支援を行っていきたいと思っています」。